



Title	鰲菴先生貽範家君行狀
Author(s)	中井, 天生
Citation	懷徳. 1941, 19, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

菴菴先生貽範家君行狀

中 井 天 生

家君諱は誠之、字は叔貴、號は菴菴、通稱は忠藏、幼名は四郎、中井氏にて、貽範と諡せられた。

家君の行狀は曾祖竹山先生に先君子貽範先生行狀があるが、今般懷德堂堂友會發行の雜誌懷德に掲載する爲に委囑せられたので、大概之に基き、國文にて編纂することゝ致した。

系 譜

貽範家君の父は諱は昌直字は玄端、諡號恭貞、祖は

諱は昌倫、字は養仙、諡號好生、原姓は井上であつた

が、廣島にゆきて、養堅字は延齊號竹庵、諡號教雲の養子となりて、その女を娶つたので、是より中井姓を名つた。教雲は初黒田如水侯に仕へてゐたが、辭職して廣島に來て、醫家となつて居られた。

教雲の父は諡號方運行西にて、前田玄以法印に仕へてゐた丈は知れてゐるが、邑里稱號もそれ以上の



菴 菴 先生 畫 像
 (森 繁 夫 氏 藏)

家系もわかつてゐない。好生君は廣島から大阪に移つて、醫業を開いて居られたが、城代脇坂東陽侯に仕へて、二百五十石を賜はつた。是が脇坂家に仕へた始である。脇坂家は最初信州飯田が領地であつたから扈從して飯田にゆき、後播州龍野に國がへになつたので、又同所に從つた。

玄端恭貞君は脇坂宗薫の女を娶りて七子を生まれた。長は懿貞君、諱は懷之、字は養元、次は鳳岡君、諱は信之、字は伯元、叔父良貞君の養子と爲る。次は權藏君、諱は廣之、柳生氏の養子となる。次は家君。季は良簡君、諱は文之、字は季禮、號常庵。二女はそれ／＼方付かれた。貽範家君は元祿六年癸酉九月二十九日に龍野で生れられた。

玄要侯の時、養仙、好生君は直言して、君意に忤うたので退隱し、恭貞君に藩の祿を襲がせたけれども、人口がふえて、家計が支へられなくなつたので、恭貞君に辭職せしめて大阪に移り、家業益隆昌に赴いた。是は寶永三年にて家君が十四歳の時である。

同五年好生君は家君を伊豫大洲加藤侯の阪邸の留守居岸田源進の養子にやられたが、正徳元年源進は故ありて黜けられ、好生君も扈從して江戸に居られたが、この爲に不興を蒙り、やがて源進も死亡したれば、家君は祀を奉じて大阪に還られたが、その未亡人が弟と謀りて、嗣子の權を奪はうとしたので、家君は決心して家に引き取りて原姓に復したが、貲産の如きは毫も干渉する事がなかつた。此の時好生君は既になくなられて、家計益窮迫となつたので、家君は四方に奔走して、其衝に當り、備

に辛酸を嘗められた。

修 學

その頃家君は廿歳前後の青年であつたが、慨然として大志を抱き、弟良簡君と與に三宅萬年先生に師事することゝなつたが、その勉強ぶりは一通りでなく、夜間は兄弟机に向つて勉強するに一筋の繩を二人の頭にかけて、互に睡氣を醒まし、床に就く時もそのまゝ解かないで、早起競争の用に當てた。此のやうにして勉強せられたので、天成英敏の資に一層の努力を加へて、家に在つては孝友、國に在ては忠敬、朋友に對しては信義など、學問の力に因て一きは發揮することを得た。

正徳三年玄要侯が疾にかゝりて、恭貞君を召されたので、恭貞君は養元懿貞君に家廟の祭祀を任せ、家君と良簡君とをつれて播州に歸られた。その頃良簡君は後藤良山氏に就いて醫學を研究して居られたが、享保元年恭貞君は良簡君を赤穂にやつて開業致させ、自分もそこに隠居せられたから、家君は母脇阪氏を大阪に迎へ、是より數年間、攝津播磨の間を往復して、弟の世話をせられる爲に絶えて間暇がなかつたが、いつも書籍を携帶して、旅館でも道中でも書物を持つて居られない事はなかつたが、生活状態は日々に困難に陥つた。是は萬年先生が安土町授業の頃であつたから、自分で炊事を助けて居られた。朋友中にはその勞苦に感服して、費用を助けて呉れる人もあつた。

喪 祭 の 著 書

正徳五年に恭貞君がなくなれたので、その喪中に良簡君と謀り、朱文公の家禮に據つて喪祭私説を著された。是が中井氏歴世の家禮となつた。七年には喪が明けたので、復大阪に来て、社友吉田氏の家に宿られ、専心讀書に耽られたので、學問が益進んだ。

建學の事業

同九年大阪に大火があつて、萬年先生の學舎も焼失したので、社友の人々と共に尼崎町に學舎を設けられたが、家君はその頃社友として建學の必要を謀られてあつたが、當時の八代將軍吉宗公は學問思想豊かな方にて、大阪建學の下心もあらせられた故、其頃江戸に居られた三輪執齋先生から手紙にてその趣を通ぜられたので、家君等は飛び立つ思であつたけれども、萬年先生は隱遯主義で、そのやうな事を望まれない故、家君は同志と協議して江戸に下り、三輪執齋大島古心の計らひにて將軍の耳に入れる事となつた。家君は家計の事など一切かまはないで、建學の一事に熱心であつたから、徒歩にて前後六回も江戸に往復して、榴風沐雨の慘を嘗められ、滯在中病氣にかゝりて、危険にも及んだが、將軍は其誠意に感じて、許可の内意があつたから、歸阪の上出願させる事となり、享保十一年四月に大阪府に願ひ出でられ、六月に府から召されて、許可の天命を拜する事となり、諸役御免の特典をも賜はつた。そこで社友と謀り、地所を廣めて修繕に取りかゝつたが、やがて工事全く落成したから、門人等は多少の義捐をなし、其殘金を積み立て、學田やうの事に當てた。是が大阪府學問所懷德堂で

ある。そこで萬年先生が學主となり、當時屈指の儒家や高足の弟子たちと教授を始め、大阪府に學問の道が興り、諸國から游學の徒が集つて來た。

家君の居室

懷徳堂修繕落成の後、家君は講堂の左塾に居られ、後右塾に移られたと見ゆるが。狹隘であつたので、講堂の北側に小齋を設け、其一間をばなき父君を祭る處となし、その隣室には文机をおき書厨を並べ、家のまはりには、暗くない程度に脩竹を植ゑて、此君窩といふ額をかけてあつた。人氣遠く塵も至らぬ閑靜な書齋であつた。問はずかたりの一卷はこゝにて書きつゝられたのである。享保十三年つちのえさるの頃であつた。家君の言行のすべては此の書中に窺ひ知られる。

家君の孝道

長兄懿貞君は播州三日月の森侯に仕へて居られたが、その前年に死去せられたので、家君は葬儀を營み、祭祀を勤められ、その獨娘をつれて歸られたが、十四年には末弟良簡君が病身の爲醫業を廢し、母君を奉じて、大阪に來られたので、家君は看護をし乍ら孝養を盡されてあつた。十五年には良簡君が母君を奉じて龍野に歸られた。その年に萬年先生が御死去なされたので、家君は代つて教授を勤められる事となり、十九年には良簡君がなくなられて繼嗣がなかつたので家君は喪をつとめ、二人の兄君と共に母君を慰め圓光寺の後に一室を造り、寡婦又は孤女等を置きて、手厚く奉侍せしめられた。

元文の始頃には母君おひ／＼高齡になられ、幾度かの不幸つゞきにて、一かたならず悲嘆せられてあつたので、孝心深き家君は年毎に五六回攝播の間を往復して、機嫌を伺ひ、或時は母君をつれて京都に遊び、又諸所の名勝を巡つたりして、ゆくも留まるも一意母君の望に任せ、衣服飲食とも、何一つ行き届かない事はなかつた。さうして母君の居所には寡婦や孤女下男下女に至るまで十人ばかり待べらせて、朝夕の奉事から吉凶の諸禮、親族朋友間の交際、宴會のふるまひに至るまで、實に至れり盡せりで、さながら富豪の家庭のやうであつた。さうして家君自らは質素儉約を守りて、随分苦しい事もあつたけれども、一切母君には悟られないやうに心をくばられた。龍野に歸省せられる折には、二人の兄君と母君の膝下に聚り、姉妹あによめやちよめ姉婦娣婦等を順次に列坐せしめ、杯盤を持ち運びて笑興じたる一門親睦の有様に郷黨感嘆せざるはなく、母君は此の間にとり巻かれて終歲嬉々として愉快なる日を送られた。是が爲希有の長壽を保たれたが、延享元年に健康を残はれたので、家君は授業を休んで郷里に歸り、家族と偕に衣服を解かずして、行き届きたる看護を爲し、自らもその冬中風にかゝられたけれども、猶朝夕の定省を怠られなかつたが、その甲斐もなく二年二月に母君は九十一歳にてはかなくなられた。是が慈敬大嫗と諡せられた方である。家君の哀慟はいふまでもなく、葬儀には龍野藩中こそつて見送られたので、人々は無上の光榮とした。同年大阪に歸られて、是まで頂いてゐた家祿を辭退せられ、侯は之を許されたが、別に手當を賜はつた。家君は母君が揖保いほのすまいから送られたあま

たの文が蠹魚の餌食となるのをいたみて、紙繩こよりに造りて、御靈に供へられた。その殘五通を揖保のなごりと名づけて、今にも存してゐる。

家君の忠節及性格

龍野敬信侯の時代に賊臣和介といふ者があつて、罪跡が發覺したので、侯は家君に視察を命ぜられた事があつた。侯は幼少にして世を繼ぎ、江戸藩邸に居られたので、和介は國政を自由にし、租税を取り立て、私腹を肥やし、奥向に取り入つては重臣を手なづける爲にその家祿を増し、自分は奢侈を窮めて私に惡謀をたくらんでゐたが、享保の末年に侯が國に歸らるゝ事となり、惡謀が彌露見して來たので、朝紳に賄賂をつかつて隱蔽を計つたために、本藩要路の人は猶豫して摘發せなかつたから、家君が命を受けて調べる事となり、奈良京都を調査した結果、罪迹が次第に顯れた。京都には和介の爲に偽書を書いた者があつたので、家君は彼の家にゆき、汝は賄を受けて文書の偽造をしたのだ、若白狀せないならば、我に覺悟がある。と色をかへて厲しく迫られたので、ふるへ出して、偽書の下書を出した。家君は之を藩に送つたので、藩から人を遣して、和介を捕へる事となつたが、和介は或王家に身を寄せて逃れようとしたから、家君は直ぐ王家に至りて、和介の罪惡を述べ、吾が君が之を認められたら大獄が興るであらう、自分は王家の潔白を知つてゐるから、證書一通をもらひたいと促したから、執事は已むを得ず之に従うたので、和介は直に執へられ、苗字帶刀を取り上げられて平民と

なり、其徒黨も皆罪せられて、國內穩になり、君はその功績を賞して祿を賜はつたけれども、受けられないので、夫人厨下の費に當てられた。家君は從來龍野藩の御恩を受けてゐたので、政事向にも少からず力を竭された。その忠誠は深く人々を感動せしめた。併し同藩當路の人と意見の相違があつた時は、剛毅にして、屈服する事がなかつた故、藩中の人々は皆一目をおいてゐた。家君は豪邁正直の人にて、その容貌は嚴肅、聲音は鐘の如しといはれて居る。大阪より母君の見舞の爲山路を往復せられた頃、賊共が火を焚いてゐた處を通り合せ、烟草の火を借りにゆかれたら、彼等は同類と思つたのであらう。且那何かうまい仕事がありますか、というたら、いやまうとんと、というて通り過ぎられた事もあつた。

洛西嵯峨に於ける隨想

家君は洛西嵯峨の風光を愛し、春秋二季には花や楓を賞玩し、普通に人々の遊ばぬ方面をも深く尋ねられたが、其往還には花園妙心寺の塔頭隣華院にも遊び、親友であつた柏巖和尚と文筆の交際があつたので、寺内の天心軒といふ一室を修覆し、詩賦の唱和をして宿泊せられるのが常であつた。天心軒は後に祥雲菴と改稱して、他に移されたが、隣華院には今にも當時の木犀が残つてゐる。北嵯峨の直指菴にも遊ばれた事があり、桂川舟遊の作も残つてゐる。かく愛嵯の情が深かつたので、老後には嵯峨に隱棲したいとの望を抱いて居られたけれども、龍野でわづらはれた病氣も癒え、生徒もおひお

ひ聚つてきたので、遂に其希望を果される事ができなかつた。

懷德堂の修繕工事

開講以來二十餘年にもなつて、書堂には修覆がまはつて來たので、家君は土木事業を自任せらるゝ事となり、寶曆元年には工事落成して、全く面目を改めた。家君が此の事業を始められる時、大工職人等を集めて、校舎の破損した事は見られる通であるが、學校には資金が實に乏しいのだ、是から積み立てゝ事業に取りかゝるには我が壽命が覺束ないから、今は先づできる丈の事をして、不足の分は五ヶ年の間に拂はうと思ふが、どうであらう、といはれた處、一同宜しう御座いますというて承諾した。席を退いてから互にいふには、旦那は信實のある方である、此度の事は安居逸樂の爲でないのだから、わし等も一つ働かうではないか、というて仕事にかゝり、棟梁は善い材木を擇び、職人等は工事を丁寧にしたので、家君は之を觀て、是では約束以上の普請になるが、相當の代金を償ふ事ができないのだ、といはれた處、一同は是は學校で後々までもお手本になります故、丈夫に造るのは私共の責任ですから、値段などはかまひません、五年間におできなさねば、十年でも一生涯でも待ちますというたので、家君は非常に喜んで、毎日酒食の用意をして、汝等に無理をさせるのは相濟まぬ事だ、どうか十分食べてくれといはれ、又夕方には風呂を立てゝ、どうか早く休んで、湯に入つて呉れといはれたので、職工等は手並を揃へて、我一にと働いた。此の工事は傭人夫以外十餘人で、正月に工を

起して、六月に竣工した。之を觀る人々はどうかう早くできたのだらうと驚いた。そこで家君は益節約を守つて、宴游の費を廢し、家人は、五ヶ年間は衣服を新調したり、美食を作つたりする事はならぬと戒め、數百金の工費は資力を竭して、約の如く償はれたので、人々はその經濟的才能に感服した。

家 君 の 死

家君は寶曆七年に發病して、翌八年六月十七日に歿せられた、壽は六十六で、貽範先生と諡せられ大阪誓願寺に葬られた。家君は播州佐用郡安部侯の邑宰植村氏の女を娶りて二子を生れた、即積善積徳である。遺狀數通を残されたが、その重なる者は學校相續者の事にて、自分死去の後は萬年先生の嗣春樓先生に引き受けてもらへとの遺言にて、數通いづれも學校の將來を慮られる事已にて、一言も一家の私事には及んでゐない。讀む者は皆感泣したとの事である。最初學問所の設けられた時、家君は同志者と約し、學校は禮義の出づる所だから、其教授となる者は責任の重き事を慎み、身を以て師表とならねばならぬ。父子



相續してはならない、自分が校事を擔當したのは不當の事である故、退任したいと思ふのだが、春樓先生は病身であり、他に適當の人物を見出さないで、宿志が遂げられないのであるといはれ、晩年土木を興されたのを見て、あれは子孫の爲に謀られるのだと思つて、尋ねた者もあつたが、笑うて答へられなかつたが、遺狀が出るに及んで、其疑は解消して、人々が敬慕する度は益深くなつた。

家君の學問教訓

家君は實踐躬行を主として、詩歌文章に重きをおかれなかつた故、著書としては詩文集、和歌文集があるばかりで、脱稿に及んで居らない者も多少殘されてあつたが、それすら散逸して、遺稿はとはずがたり五孝子傳の外幾何も殘つてゐない。

家君は五井蘭洲先生と親交があつたが、先生が津輕藩侯の召に因つて同所にいつて居られた十餘年間は書牘に因つて學問上の交際をつゞけて居られたが、大阪に歸られてからは二子積善積徳に、五井君は予が畏友だから、汝等之に師事せよと諭された。其尊敬して居られた海内の諸儒には、大阪にては蘭洲先生の父持軒先生、播磨にては藤江熊陽先生、梁田蛻巖先生、京都にては三輪執齋先生、伊藤東涯先生、江戸にては萬年先生の弟觀瀾先生、室鳩巢先生等があつた。その學風は平易を主として、近時の學者が虛文に驚せて、實行をおろそかにするのを惡み、平生論語一部は生涯用ゐても餘りがある。何も博學多能を誇るに及ばないといはれ、又鳥獸は各其群を成してゐるが、人の道は人でなくて

何處に求めよう、世の中の碩學といはれてゐる人は才識古今に通じ、學問深奥を究め、口に高尚なる事をいひ、或は經世の才にたけて、議論を闘はせてゐるのは大變立派なやうであるが、その實行を見ると、孝弟二字に對して愧かしい事のあるのはどうであらう、といはれた。故にその教育方針はいつも孝悌の二字を掲げ、被教育者の程度次第で、淳々として啓導せられたので、各人その材能を育成せられ、暴漢も自然に感化せられた。學問上の事に就きて質問する者があれば、之に答へて、孝弟忠信、只是丈だ、予は其外の事を知らない、汝自ら日常の家事に就いて考へたならば、多く教へられる所があらう。當世學問の弊害は言ふにも足りない、といはれた。安志小笠原侯は家君の名を聞き、時々禮を以て招かれ、經書の講義を聞かれる事もあり、大阪府の松平、稻垣、佐佐、小濱、横山の奉行たちは、或は門弟の禮を執られたが、家君は謙讓の態度を以て、敢て自ら師家とならず、諸家よりの待遇が益厚くなればなるほど、その舉動は彌卑くなられた。

家君の日常

家君の日常行事は、毎日早朝に起き、先づ家廟を拜して後、机に向つて讀書せられたが、行儀正しく端坐して、少しも容を崩すことなく、人に對しては溫和な容貌にて、人から畏敬して親まれた。諸方から來る書狀には返事を怠らず、來客の待遇も禮儀正しくして、能く相當の歡待を爲し、尊長には敬を致し、幼童には慈愛を施され、吉凶患難には力の限を盡し、親戚縁故の人々は皆たよりとした。

兄弟の孤女が四人あつたが、いづれも嫁粧を調べてかたづけ、姻戚中繼嗣の絶えた家には一人の嬢を嫁がせ、嬢の子の古林相如が幼少にて孤子となつたので、吾が子同様に撫育せられた。たよる處のない郷里の貧困者をば救済し、その才能に應じて身の立て方を教へ、或は推薦して仕官せしめ、或は無頼の子弟がその慈善に甘へ、好辭を弄して、救済を乞ふ者があつても、不便に思つて之を助け、懇に説諭せられたにも拘らず、面白からぬ結果になる事があり、慈善心が聊かもかはらないのを見かねて、家人が意見する事があれば、我もその欺詐を知つてゐるけれども、同郷の情誼としてやめる事はできぬ。彼が憐めないのをどうする事もできない、と答へられた。いつも言はれるには、人間の世に在るのは相助けあつてゐるのだから、我が救済を止めた時は人から救済せられる日である、といはれた。慈愛の心を以て正義の途を踐まれた事は此の通であつた。それ故生涯貧困にて、餘資を貯へる事はなかつたけれども、晏然たる有様であつた。人から宴會に招かれた時は早くゆきて、先に歸られたが、停められると、自分は御馳走に預りて十分樂みましたが、下女下男等の苦勞も思はねばなりません、といはれた。人から美食を餽られた時には必ず家族等に分け與へて後に筋を取られた、恩愛の情が細の事にまで行き届いてゐる事は此の通であつた。其頃は太平の世の中にて、市街は富み榮え、人々は奢侈に増長した状態であつたが、家君は其風に感染する事なく、休業日に出游せらるゝにも、粗末なる辨當を携へて、料理亭に立ちよらるゝ事なく、況や非禮の街に足を入れられる事は一たびもなか

つた。游戲玩弄の器具には心を留むる事はなかつたけれども、書畫某局射御蹴鞠等の場所に列つた時
には、終日倦むことなく、人の樂む所を偕にして厭ふ事なく、可否の批判を下す事もなかつた。此の
やうに平和な性質であつたけれども、一たび事變に出合はす時は、果斷勇決、何人も及ばぬやうであ
つた。家庭の状態も溫威並び行はれ、嚴正なる訓戒を少しも緩める事なく、寧ろ蘭の如く摧けても艾
の如く榮えてはならない、といふのが平素の教訓であつた。世をさるゝに及びて、長老等皆涕を流
して、先生はなくなられた、我等は何を樂に世を送らうかといひ、輕薄なる子弟の風習に惱む者は、
先生はなくなられた、我如何にして之を教誡すべきかというた。訃音の傳はつた時には、播磨の人に
は靈位を設けて、祭祀を捧げた者もあり、識るも識らぬも皆いたく哀んだといふ事である。

贈 位

大正六年十一月天皇江攝の野に陸軍大演習を統監せさせ給ふ際、關係地方の勤王志士碩學鴻儒四十
四名に贈位の御沙汰があらせられ、髯菴先生に正五位を追贈せさせ給うた。十二月二十四日東京神田
區役所に於て贈位記并に辭令を交付せられた。

附 載

天生終世の念願

貽範家君が洛西嵯峨隱栖の希望を抱き乍ら、教職の爲に得果さずして長逝せられたのは、子孫とし

て痛恨に勝へざる所である。予が五六十年間嵯峨愛好の心を抱いてゐる事は、人々に知られてゐるが、是れ平凡なる愛峨の私情ではなくて、家祖の憾念をその亡き後に安慰康樂せしめん爲である。昔朱文公はその父君が徽州の紫陽山を慕ひ、紫陽書堂の印を刻して、紫陽を忘れられなかつたが、遂に往くことかなはずして歿せられ、文公に遺命して、潭溪の上に移らせられたが、文公も三十年を経ても往くことかなはずで、先君子の印文を扁額にして聽事に掲げ、先君子の志を忘れられなかつた。その愛慕の情が吾が家の事に酷似して居るので、予は家君の志を哀み、嵯峨に家君の祠堂を造り、家君がその母君を慰められた如く、寡婦孤女等特志の女性をして、家君并にその母君、及兒孫の靈位に奉事せしめ、寺院の僧尼の如く、歴世相續きて、祭祀を絶やさないうりにしたいと熱望してゐるけれども、少からず費用のかゝる事にて、後援者を持たぬ微力の者には及ぶべくもなければ、子孫なき自分等は空しく望を抱き乍ら世をさる事であらうと思ふが、家君に捧ぐる微旨をこゝに録して、紫陽夫子の蹤を追ひ、死して後にも家君の志を永久に忘却せない事を盟うておく。